

新2年生へメッセージ

名が変わる、質が変わる、そして私は変わる

跡見学園理事長 やまぎみ かずひで 山崎 一穎

昨年みなさん方は入学試験に合格し、これから始まる大学生活に期待に胸を膨らませ、4月3日の入学式を、楽しみにされていたと思います。

それが新型コロナウイルス感染の流行により、入学式が中止となり、大学の構内に入れず、授業もなかなか始まらない日々に苛立ちと不安を感じながら、自宅待機を余儀なくされました。

私が一番心配していたことは次の事です。新入生のみなさん方が自分は何処に居るのか、自分は本当に跡見学園女子大学の学生になったのであろうか、その証（自己の帰属意識をアイデンティティと云います。）を実感できずに苦しんでいるのではないか、そのことが一番の気掛かりでした。

大学生活の出発にあたって、みなさん方一人ひとりに自己のアイデンティティが得られない苦痛を与えてしまったことをお詫びします。

改めて仕切り直しをいたします。ようこそ跡見へ、ご入学おめでとうございます。

私がみなさん方へ、あの日贈りたかったメッセージをここに披露いたします。

大学へ入学したことでみなさん方の呼称は変わりました。初等教育の小学校では「児童」、中等教育の中学校、高等学校では「生徒」と呼ばれ、高等教育の短期大学、大学では「学生」と名前が変わります。

名が変わるということは、質が変わるということです。質が変わるということは、学ぶ姿勢と学ぶ方法が変わるということです。

高等学校までは「勉強」といいます。「勉」はつとめる。「強」は強要するということで、「勉強」とは、好むと好まざるとに関わらず、強制的に学習をしなければならないのです。基礎教育ですから当然といえば当然です。

大学では「勉強」とはいいません。「学問」をするといえます。「学習」でなく「学修」といいます。「学問」という漢字は上、下の漢字が等質に並置された熟語です。「学問」とは、学びつつ問い、問いつつ学ぶという双方向性を持った言葉です。大学とは学と問を修得する所です。端的に分かり易く言えば、「思う」ことから「考える」ことに転換することです。

考えるためには考える材料（種）が必要です。材料や種を沢山持つためには読書以外ないのです。時代がどんなに変わろうと、新型コロナウイルスが流行しよう、読書によって己を鍛えることです。

今コロナが流行していますので、さしあたりカミュの『ペスト』か、デフォーの『ペストの記憶』を読んで見て下さい。

卒業までに、アウシュヴィッツの強制収容所に於ける一心理学者の体験を記したフランクルの『夜と霧』を読んでほしいと思います。人として深く考えることになります。

読書に加えて友人をつくって下さい。大学時代の友人は生涯の友人となります。友人という親しい他者から学ぶことは多いはずで。

今年もオンライン授業と対面授業の複合型の授業が待っています。早くハイブリッド型の授業に習熟し、みなさん方が充実した学生生活を送られますことを祈念いたしております。

元気で頑張りましょう！